

### 三、滑稽俳句の実際（その一）

河村正浩

現代の俳句は花鳥諷詠から前衛俳句、自由律とその幅は広い。そこで吾が書棚や近刊の中から定型俳句について見て行きたい。

世（の）中や蝶のくらしもいそがしき 一茶

かしましや江戸見た 厂<sup>かり</sup>の帰り 様<sup>よう</sup>

永の日を喰ふやくはずや池の亀

何れもイロニーシュな表現であり、人間の様を小動物に託して風刺している。

目出度さもちう位もおらが春 一茶

皮肉っぽく捻りを利かせている。

夏休み国語算数理科睡魔 坂井修次

通帳に一円の利子山笑ふ 三野公子

待合いの金魚肥満で息災なり 河口凡夫

何れも風刺がある。宿題潰けの夏休み、たった一円の利息、多くの人は身につまされる。三句目は病院の待合室か。金魚を詠んでいるが、一茶と同様に人間の様を金魚に託して詠んでいる。こうした作品を詠むには普段から問題意識が大切であり、何れも批評が根っこにある。

愛妻家小西昭夫氏蠅叩く 小西昭夫

自画像とも言うべき句、軽快である。この句は明らかに反語である。口が裂けても「恐妻家」とは言えない。

山椒魚詩に逃げられし顔でのぞく 加藤楸邨

ユーモアのある作品だが、そこはとない哀愁（ペーソス）。

咳暑し茅舎小便又漏らす 川端茅舎

御僧や今朝さへずりの擲揄に覚め

世捨人目刺焼く瓦斯ひねりたる

病む茅舎の誰にも言えない辛さ。「御僧」「世捨人」は茅舎自身と言われている。この句について山本健吉は「軽みとユーモアを持っている」と言った。ペーソスそのものである。

花鋏チューとリップに切るなんて 芳野ヒロユキ

ウイトそのもの。文字をうまく利用し、抒情など糞喰らえとばかりに、チューリップをキスと唇にしてしまった。口語故のよろしさ。

涼の字に京と水あり川床料理 林菊枝

花と死の文字どこか似て曼珠沙華

文字の形象の類似を詠んでいるが、季語の取り合わせが実に素晴らしい。ウイトもまた感性である。

三月の甘納豆のうふふふふ 坪内稔典

睡蓮へちょっと寄りましょキスしましょ

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ

思わずくすりとしてしまう。甘納豆は大の好物であろう。季節感とふくみ笑いの妙。二句目は恋人とのひとときか。三句目の何ともいえないぽぽの感触、

エロチシズムと言ったら深読みか。だが、こうした句は意味性を詮索しないで、口語、言葉の繋がり、リズムを楽しめば良い。そして、そこから何らかのイメージが湧き起これば言うことなし。解ったようで解らない。解らないようで解る。それでよい。